INTERNATIONAL COMMISSION AGAINST DEATH PENALTY

少年の言葉を求めたい

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」
東京都荒川区南千住一-五九-六-三〇二
http://sobanokai.hanamizake.com/

二〇二一年一〇月に甲府で起きた、放火殺人事件の当時一九歳の少年は、一審判決の死刑を受け入れて確定死刑囚になりました。

少年は、罪状を認めて刑を受け入れることで自らの罪の償いとしました。しかし、三審制の一審の審判だけではあまりにも、真実の追求までには辿り着いていないのではないかと私は感じています。

小学二年生で実の父が窃盗で逮捕されて周囲の人々の冷たい視線に晒されるようになりました。仲の良かった友人からは避けられて、孤立化して「少年と遊ぶな」などという大人の冷たい仕打ちを受けたということでした。

両親は離婚して、母が再婚した養父からは暴力も受けていました。

中学一年で不登校になり、摂食障害になり「起立性調節障害」（思春期前後の小児に多くみられ、起立時にめまい、動悸、失神などが起きる自律神経の機能失調）の診断で入院しました。

そこを何とか乗り切って、定時制高校に入学して気持ちを全て切り替えて生徒会長まで務めるほどに前向きに変わったところで、青春期の誰にでもある、恋愛の『いたみ』から抜け切れない中でこんな惨事を起こしてしまいました。

でも、もし誰か相談できる人がいたら、思い止まることができたのではないかと思えます。

「一九歳は大人だ。事件の責任は取るべきだ」という見解が多いかもしれません。

人間の背負った運命はそれぞれ違うと思います。運命の中で耐えられない困難に当たり、解決に導く出会いがあって修正して立ち直ることができる者が大半な中で、この少年には残念ながらその出会いが充分になかったと思います。

少年に、「人の心はまだ信じられる」という言葉をかける人との出会いがあったならば、思い止まることができたのではないでしょうか。

『名前を呼ばれたこともなかったから』この本は、奈良少年刑務所の更生教育「社会性涵養プログラム」で講師をしていた、寮美千子さんが監修した少年の詩集です。

罪を犯した少年たちは、生きている社会の中で自分の言葉を発せられずに生きてきました。詩を書き、読むことを通して自分を見つけられて更生ができると信じて寮さんはこの詩集を作りました。

甲府の少年はまだ考えて、言葉を生み出さなければならない仕事があると私は思います。極刑を受け入れるまでに、もっと言葉を出してほしいと願います。

彼がこれまで言葉を抑えて生きていかなければならなかった社会に関しても、彼の言葉からもっと感じたいです。（S・Y）